

迫る地上戦 20万人疎開に尽力



沖縄の人々に疎開の大切さを説き続けた荒井退造 (塚田保美さん提供)

県警察部長 荒井退造 沖縄 命の恩人

宇都宮の誇り

生誕地 偉業語り継ぐ



塚田保美さん



嘉数昇明さん

太平洋戦争中、沖縄県警察部長(現県警本部長)として、沖縄県民の疎開に尽力した荒井退造(一九〇〇～四五年)をめぐり、生誕地の宇都宮市と沖縄県で住民同士の交流が生まれている。二月には沖縄で、両県の有志が初めて合同の追悼コンサートを開く。玉碎が美德とされた時代に、命を最優先した指導者の精神を語り継ぐとする動きが活発化している。

荒井は、一九四三(昭和十八)年七月、警察部長として沖縄に赴任し、住民の安全を守る任務の総責任者となった。沖縄戦では「最も大切なのは住民の命」という信念に基づいて仕事し、沖縄では今も慕われる。宇都宮市の郷土歴史家、塚田保美さん(八八)は「戦時の官僚としては異例の姿勢」とみる。

当初、軍が「日本は勝つ。米軍は沖縄に上陸しない」と主張したため、疎開の機運が高まらず、荒井は「まつげに火がついてから慌てても知らんぞ」と怒鳴ることもあったという。

危機感を募らせた荒井は、まず警察官や県職員に家族の疎開を促した。各地で講演会や座談会を開き、住民たちに疎開の必要性を粘り強く説いた。この姿勢が県民を動かし、最終的に島田勲知事とともに、二十万人超を九州や沖縄県北部などに退避させたと言われる。

荒井自身は米軍の上陸後も沖縄にとどまり、住民の避難の指揮を続けたが、四五年六月、現糸満市の摩文仁周辺で、島田知事とともに消息を絶ったという。

約二十年にわたって荒井を調査する塚田さんは二〇一三年、自身

荒井退造 1900年、栃木県清原村(現宇都宮市東部)に農家の次男として生まれる。警視庁巡查しながら明治大の夜間部に通い、27年、内務省に採用された。東京都の麻布六本木警察署長などを経て43年に沖縄県へ赴任。45年6月、米軍の攻撃激化で任務の継続は不可能と判断し、部下らに解散を命令。島田知事と自決したとの説が有力だが、遺体は見つかっていない。2人が最後に目撃された糸満市の摩文仁には戦後、慰霊塔が建立された。

両県有志が来月追悼コンサート

と荒井の母校の宇都宮高校(二人の在学時は旧制宇都宮中学)の同窓会報で、荒井の生涯を紹介した。記事は反響を呼び、宇都宮市のNPO法人「菜の花街道」が昨秋、功績をしのぶ寄稿誌を発行。同市の小学生が摩文仁に立つ荒井と島田の慰霊塔を訪れたほか、授業で荒井を取り上げる高校も増えた。

こうした生誕地の動きに、元沖縄県副知事の嘉数昇明さん(七七)も着目する。島田知事や荒井の功績を語り継ぐ活動を続けてきた嘉数さんは昨年、宇都宮市を二度訪れ、塚田さんとも対面した。

二人は意気投合し、摩文仁の戦没者追悼施設「沖縄平和祈念堂」で二月二十二日、両県の人々が集う追悼コンサートを開くことが決まった。塚田さんの呼び掛けに応じた宇都宮市のピアノ、オカリナ奏者やソプラノ歌手らが出演。沖縄戦を歌った「さとうきび畑」などを披露する。

嘉数さんは「新たな縁を大切に、沖縄とともに生きた荒井の尊い姿を、未来に伝えたい」、塚田さんも「荒井のような指導者の存在を語り継ぎたい」と話す。



荒井退造と島田勲知事をしのぶ慰霊塔(沖縄県糸満市で「NPO法人「菜の花街道」提供)